

医史学と私

三 木 栄

指示された題名の「医史学と私」に従い、述べる。私は明治三十六年（一九〇三）堺市に生まれ、少年時から余り勉強が好きでなく、よって楽なところを選んで、中学を経て自由闊達な七高に入り、九大医学部を昭和二年に卒業した。学生の時から祖父から伝えられた古医書に何となく心が引かれ、学友会誌に医史についての幼稚な雑文を二つ投稿した。大正十五年に日本医史学会に入会、富士川先生に拝眉しえた。卒業後誘われるままに朝鮮半島へ渡り京城大学内科に職を置いた、次いで道立水原医院に転じ、前後十六年間に在籍した。ところが朝鮮に医史なるものが皆無に近い、よって早速この国の風俗習慣や一般史などの書を読んだ。かくて少しずつ風土になじんで来たので、医学史研究へ没頭するようになった。これが私のまことの医史学勉強の始まりである。

京城大学は新進気鋭な学徒に満たされ、私は本職勤務の全余暇を挙げて法文学部の自由高潔な先生方や在野の朝鮮の諸学識に親しくして頂き、教えを受けた。一方、朝鮮古医書の披見収集に熱中した。古本屋や仲買人と仲良くなり、協力してくれた。しかし、朝鮮古医書はこの地に少なく、却って日本の内閣文庫や図書寮に纏まって伝存していることを知り、学会などで日本・満州・北中国に向向することに、その地の著名図書館や大学図書館を歴訪し関連文献を披見した。

かくして「朝鮮医籍考」と題して『中外医事新報』、『日本医史学雑誌』に次から次へと発表した。これは戦後、昭和三十年頃『朝鮮医書誌』として孔版で刊行した。これは昭和四十九年に増訂し活版となされた。

「医籍考」と並行して、朝鮮の医史に関係する全出来事を洩れなく記録せんとして明細な『朝鮮医事年表』を作製した。

これは永らく出版し得ず、淋しく本棚の隅に置かれたままであった。しかし、幸いにも日本医史学会と東洋医学会の同情ある方々の援助を得て、ついに昭和六十年に出版され日の目を見た。

一方、終戦後右二書原稿を土台として昭和三十年頃に『朝鮮医学史及疾病史』を完成し孔版で刊行した。昭和三十一年に改訂し活版刊行し得た。これで朝鮮医学史の四部作三冊が世に出たのである。

この著述の間、史上最惨事の大戦が挿まれていることは言うまでもなく、私の家族は敗戦一年前に父が老衰病臥のため故郷堺へ帰って来た。兵隊に採られ軍需会社に勤め、戦災を受け逃げ回った。終戦後、中野操・阿知波五郎・岡西為人・宗田一ら諸博士と一丸となり、会合も屢々催し関西医学史の発展へと努めた。私は郷土医学史を調べた。このうち大きい収獲は伏屋素秋の業績の発見実証である。

昭和三十年以降、私は前から中国医学史にも多少通じていたので、日本—朝鮮—中国、さらに研究を西方へと進めた。西域の医学を知ろうとした。これは東亜だけでなく広く世界医学交流を一九としたものへの編述をなさんとの志である。西域の医学研究では、東洋文庫が好箇の拠点である。これには親友田川孝三博士に随分お世話になった。かくてスタインやペリオ等の西域出土医学関係古文書を調べ、しかしながら中近東・インド・エジプト・欧州・ソ連・北米・中南米など、手に負えない分野は、先進欧米諸学者の著わした医学史書によって知見を窺った。かくて先ず『東西医学の一元論・医学史研究の体系史論』なる小著を発刊し、ついに昭和四十七年に『体系世界医学史』を成就し出版し得た。編述の都合上、書誌学的研究の形として、この書の第一部において私の理念とする全世界医学一元論を説き（これは後に全文を英訳してもらい国外へ頒った）、第二部は編年医学史、第三部は医学史研究の書誌、第四部は古今の主要業績原典解説目録とした。この膨大な文献調査には親友の阿知波五郎博士の心からなる御援助を受けた。思い出して感謝あるのみ、氏がいなければこの書は成就し得なかつたであろう。この書と次出の『人類医学年表』（昭和五十六年刊）の両書は氏との共著となっている。

つらつら思うに、医史学研究の真の目的は、医学医療の本然の姿―本質を実証的に明らかにすることに他ならない。一般末梢的な研究は、本質に連なりはするが、悪く言えば遊戯化を免れえない。医史学は厳正な学問で、全医学・分科医学を統率し、大所から向う道を示すものであらねばならない。医史学研究の責任は重いのである。これには「医」なるものの始原から現代に至るまでのその変遷過程を明らかにし、本義を求めねばならない。私は簡易に「医」の本質は「自然である生命力を尊び、医倫理の下、心身の病を癒し健康を増進せしめることである」と定義した。かくして、医道―医倫理の高揚が第一と考へ、昭和五十年に「医師の誓詞」十条をヒポクラテスの心に基づき公表し世に問うた。よってまた理解を深めるため「医師の誓詞」の解説と医学の本質とは何かと、『医師の誓詞・医学本質論』なる簡要書を昭和五十二年に刊行頒布した。この書において「誓詞」第一条の「自然」について説明し、「誓詞」と日本国憲法の条文を比考し同一軌路にあることを示し、そして人間医学の成立と発展、医学医療の進む道を私の知を圧縮して説いた。後また、昭和五十八年に『医倫理考・東西医学史論』を重ねて刊行した。

さてさて、私は臨床と医史学との両頭立ての荷馬車に乗って、一生の終わりまで休まずやって来た。医史学の馬の方がいきり立っていたかも知れないが、診療をおろそかにしたと思っではない。とにかく終着駅に着いたようである。私は空しい趣味や道楽はやらない。生活の全余暇を挙げて研究に当てたまでである。私の親友で私と同じ経歴の方も少くない。訪古調査旅行は度々したが、これはみな研究に関係があるもので、観光旅行はしたことがないと思う。狂人と言われまいまでも変人と見なされていた気もする。

研究の相手は迷惑をかけない書物が主である。これには図書館を利用する。辞を低くして書籍を見せて貰い、館員の方と親しくなるとよい。司書の方は学者である。借用した本は丁寧に扱ひ出来る限り早く返納することが大切である。しかし、常時必要の図書の購求は止むをえないが、コレクションの深入りは禁物である。購入して溜った不用の書は、処分していけばよい。

私の著書は大体自費出版である。当初出版費に多少とも援助があればと思ひ、根気よく有力者に渡りをつけたが、この世界にも学閥や縄張りがある、私の場合はためであつたので、以後意を決し本は売り払い、出版費の足しにした。これには妻の虚かな遣り繰り内助も多かつた。出来上つた本は、世話になつてゐる出版社や古書店に頼み依託し販売して貰つた。しかし出版費の半分が戻つて来れば万々歳である。

私は年老い一昨年大病にかかり心身共に衰えた。六十余年間にわたり私に与えられた諸先生諸学兄の学恩と同情に対し、衷心から厚く御礼申し上げる次第である。頓首々々。

末に、厚顔を顧みず雑誌や新聞に載せた百数十に及ぶ小文などは除外して刊行し得た成書だけを次に掲げて置く。

- 一 『朝鮮医学史及疾病史』 B 5判、改定版、六二〇頁、二段組、図版九十八、図表三十五、一九六三年刊
- 二 『朝鮮医書誌』増修本、A 4判変形、五三六頁、図版三十頁八十図、図式表六、一九七四年刊
- 三 『朝鮮医事年表』 A 5判、表式、六〇〇頁、図版四、一九八五年刊
- 四 『医学史研究の一元的体系』 A 5判、五〇頁、図式十二、一九六五年刊
- 五 『体系世界医学史』(阿知波五郎と共著) 書誌的研究、B 5判、九〇〇頁、図版四、図式十二、年表図一、一九七二年刊
- 六 What is Medicine? Medicine is common to the East and the West. What is the History of Medicine? A 5判、全英文(上村浩通訳)、一〇八頁、図版一、図表十三、一九七六年刊
- 七 『医師の誓詞・医学本質論』新書版、五〇頁、図式九、堅牢精裝本、一九七七年刊
- 八 『人類医学年表』(阿知波五郎と共著) B 5判、五五〇頁、図版六、図表一、一九八一年刊
- 九 『医倫理考・東西医学史論』 A 5判、七〇頁、カラー図二、一九八二年刊

私の一生の研究は、凡そ前半期は朝鮮の医史、後半期は世界医史と医倫理史である。因みに上記の諸書は、挙げて京都の思文閣に括してある。

八十四歳冬記す

(日本医史学会名誉会員)